

聖書:第一列王記9章1～14節

説教:この宮は廃墟となる

はじめに

イスラエルの歴史を振り返ると、ソロモンが王であった四十年間がもっとも輝かしい時代であったと言われます。今日の箇所を見ても分かるように、イスラエルは経済的に大きな発展を遂げていきます。かつてはひどいありさまでした。イスラエルという国の名を名乗ってはいましたが、実際には国と呼ぶのもまことに心もとない状態です。収穫の季節になると、周りの国から敵が簡単に国境を越えて折角苦労して育てて収穫した作物を全部奪っていく。ダビデは、そのたびごとに部下を連れて敵を追い返すために出陣しなければなりません。敵の侵入を防ぐのに手一杯で、国の経済のこととか、将来のことを考える余裕はほとんどありませんでした。しかし今は違います。外国から金（きん）を初めとして貴重な産物が次々と輸入され、諸外国を圧倒するほどの力を蓄えるようになった。そればかりではありません。ツロの国の王ヒラムの支援を受けながら七年の歳月をかけて、ダビデの時から念願となっていた主の宮を完成させることもできました。

今日の箇所は、シェバの女王がソロモンを訪ねてくるところから始まります。ここにどのような神のみこころが記されているのか、ともに見てまいります。

## 1 シェバの女王の来訪

### 1) 聞いた

シェバは、今のイエメンのあたりにあった国だと言われます。地図で見ると、正面には紅海という海が広がり、後ろにはアラビア半島という広大な砂漠がひかえていますから、自然にできた要塞のようなものです。敵から攻められることがありません。それに加えて、交通の要衝でもあってたくさんの物資が行き交う場所でもあった。貿易が盛んであるということは、いろいろな国の情報も入って来ます。ソロモンのことも聞こえてきました。そのことについて1節にこう書かれています。「ときに、シェバの女王は、主の御名によるソロモンの名声を聞いた。」

注意していただきたいのは、「ソロモンの名声が聞こえてきた」とは書いてなくて、「主の御名によるソロモンの名声を聞いた」とあるところです。ソロモンには主と呼ばれる神がついている。その

神とはどのような方なのか。そのことを是非この目で確かめたい。そのような思いが日に日に募っていきます。

### 2) 謎かけ

シェバの国とイスラエルは、地図で見ると二千キロメートルは離れていて、おいそれと行けるような距離ではない。それでもあるとき、女王は知りたいという思いを抑えきれず、大勢の部下を従え、また多くの金銀財宝をもってエルサレムを目指します。それらといっしょに、ソロモンの知恵を試すため質問も携えていきました。1節では「難問」となっているところは、ほかの箇所では「謎かけ」と訳されることばです。日本ではと子どもの遊びのイメージがありますが、古代中東の世界では政治的な取引にも使われていたようです。聖書に出て来る話として有名なのは、士師記14章に描かれているサムソンの謎かけでしょう。サムソンはペリシテ人たちに対し、この謎を解いたら豪華景品を贈ろう。もし解けなかったら私に景品をよこさない。そんな取引をします。このことが発端になって後に大きな事件に発展していく。そういうことが書かれています。

シェバの女王は、ソロモンの背後におられる神のことをもっとよく知りたいという目的があって、難問を携えていきます。

### 3) 知恵、宮殿、よく訓練された部下

ところがいざソロモンに謎を解かせてみると、即座に解き明かしていった。その知恵の深さたるや誰も真似ができない。そればかりではない。宮殿も、ソロモンの側近たちの良く訓練された態度ふるまい、ささげ物のすばらしさ。どれもこれも息も止まるほどだった。シェバの女王は、貿易が盛んに行われていた国際都市の女王ですから、おおよそこの世のすばらしいと言われているものは全部見て知っているつもりだった。ところが、ソロモンのところにあるものは、すべて桁違いにすばらしいものばかりで腰を抜かしてしまいます。

### 4) 告白

興味深いのはこの後です。シェバの女王はもともと異教の神々を信じる者であったはずなのですが、9節でこのように語っています。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主はあなたを喜び、

イスラエルの王座にあなただを就かせられました。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義を行わせるのです。」

1節で「主の御名によるソロモンの名声を聞いた」とあったように、以前からソロモン自身というよりも、ソロモンの背後におられるイスラエルの神に強い興味を示していたようなのです。そのためには二千キロの道のりもいとわない。そんな人ですから、神さまのことについてソロモンに次々と質問したと思うのです。それに対しソロモンが主について証しをしていきます。自分が今イスラエルの王に就くようになった次第から始まって、まだ十九歳で経験もない自分がなぜイスラエルを治めることができたのか。悩んでいたときに主に祈ったら、主は世に並ぶものがないほどの知恵を与えてくださった。そればかりではなく、主はイスラエルにこのような繁栄も与えてくださった。そんな証しをしていきます。

それを聞いて女王は、これは人の力によるものではない。イスラエルの神の力によるものだ。ここには本物の神がおられる。異教の神々を信じる者にも納得できた。それで9節のような告白につながっていくわけです。

## 2 二人の信仰

### 1) ソロモンの信仰

さて、ここから一步踏み込んで考えていきます。いったいなぜここにシェバの女王の話が出て来るのか。女王の口を通して、ソロモンは、主に喜ばれていたすばらしい王さまでしたということをお願いしたいのでしょうか。しかし前回言いました。ソロモンはどんな信仰者だったのか。神殿は建てました。たくさんいけにえも定期的に欠かさずにささげました。イスラエルの人々のためには、「主のすべての道に歩み、主の命令と掟と定めを守らせてください」（8章58節）と祈りもしました。

ところが実際はどうだったのか。隣の国のツロの王ヒラムから借金をして神殿を建てたのですが、その借金を踏み倒そうとしました。在留外国人には親切にしなければならないと律法にあるのに、強制労働を課して厳しく扱う。異教の外国人を妻にしてはいけないとやはり律法にあったのに、七百人の妻、三百人のそばめを迎えて、とうとうその女性たちが信じていた異教の神に心が奪われていく。その結果、ソロモンの死後わずか数十年で国が北と南に分裂し、やがては滅ぼされていく。その素地を作ったのはみなソロモンだったわけです。

とてもすばらしい信仰者だったと手放しで言えるようなものではなかった。

いっぽう、シェバの女王はソロモンの智恵とすべてのものを見て「あなたの神、主がほめたたえられますように」と告白する。これをどう考えたら良いのでしょうか。

### 2) シェバの女王の信仰

結論から言えば、シェバの女王は非常に賢い言い方をしている。二千キロの道のりを旅をしてソロモンのところに乗り込んでくるだけのことはあります。確かに、女王はソロモンの智恵と業績を自分の目で見て腰を抜かすほど驚きました。

でも、女王がなんとと言ったかよく見てください。「ソロモンはすばらしい」とは言っていない。7節で「あなたの智恵と繁栄は、私が聞いていたうわさより、はるかに勝っています」とは言っています。でもそれはソロモン個人の能力によるものとはひとことも言わない。9節、「あなたの神、主の御名がほめたたえられますように。」こう言っている。ソロモンではなく、主がすばらしいと言っている。シェバの女王は、ソロモンを見るために来たものではありません。主にお会いしたいという熱心をもってやって来た。そして見事に女王はソロモンの背後におられる主を見上げることになりました。目で見えたものがすべてとは考えません。目には見えないけれど、確かに生きて働いておられる主がそこにおられることがはっきりとわかりました。

### 3 女王はやがて来られる主を告白していた

9節をもう一度読みます。「あなたの神、主がほめたたえられますように。主はあなたを喜び、イスラエルの王座にあなただを就かせられました。主はイスラエルをとこしえに愛しておられるので、あなたを王とし、公正と正義を行わせるのです。」

ここで「あなた」とは、もちろんソロモンを指します。でも、この「あなた」を「救い主」と言い換えてみたらどうでしょう。

新約聖書を見ていくと、全部このことが成就していくのです。

父なる神は、救い主イエス・キリストがヨルダン川の水から上がられたとき、「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ（マルコ1章11節）」と言われました。この方はエルサレムに入られるとき人々から「イスラエルの王（ヨハネ12章13節）」と呼ばれて迎えられました。そしてパウロはこう言いました。「主イエスは、私たちのそむきの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認

められるために、よみがえられました。（ローマ4章25節）」

ソロモンは、公正と正義を行おうとしたかも知れませんが、それは完全なものではなかった。むしろ大変な罪をイスラエルにもたらすことになってしまった。その先には国が滅び、神殿が破壊されていくという悲惨な結末が待っていました。でも、私たちの救い主は、完全な公正と公義を十字架で打ち立ててくださっていた。もはや死は滅ぼされ、永遠のいのちだけが私たちの先に用意されている。これが公正と公義です。

シェバの女王のことについては実はイエスご自身もすばらしい信仰者のひとりとして触れておられました。「南の女王が、さばきのときにこの時代の人々とともに立って、この時代の人々を罪ありとします。彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし見なさい。ここにソロモンにまさるものがあります。（マタイ12章42節）」

私たちは、落ち着いているときならば「主は生きておられる」と告白するかも知れませんが、でも予想もしていなかった突然のことに出会ったとき、目を見たことや耳で聞こえることがこの世界のすべてであると考えてしまいます。その瞬間、主はどこかに吹っ飛んでしまうのです。

でもシェバの女王はどうであったか。一瞬、目を見たもの聞いたことに驚きはしました。しかし、その背後におられる主を見ることは忘れなかった。

私たちもそのような目を与えていただきたいと願わされます。